The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪方言における「イ」の機能 : 文末詞「ワイ」「カイ」の意味にもとづいて
Author(s)	野間, 純平
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2012, 10, p. 55-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23236
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 10 号（2012 年 3 月）55-65

大阪方言における「イ」の機能

―文末詞「ワイ」「カイ」の意味にもとづいて―

野間　純平

【キーワード】大阪方言，文末詞，聞き手目当て性

【要旨】

本稿では，大阪方言の文末詞「ワ」「カ」に後接する「イ」の意味記述を行った。その分析に当たっては，「ワ」と「ワイ」を比較し，「カ」と「カイ」を比較し，両者に共通する「イ」の意味を抽出するという方法を用いた。そしてその結果，「ワイ」「カイ」の「イ」は，「文末詞の聞き手目当て性を強める」という機能を持っていることが明らかになった。具体的には，聞き手に対する「突きつけ」や「責め」など，様々な意味として表れる。それは，「イ」が形式的に独立性が低く，意味も抽象的であることと関係する。また，本稿では「ワイナ」「カイナ」という形式を考察の対象から外したため，そちらの形式についても考察を深め，「イ」の持つ意味をより詳細に記述することが今後の課題となる。

1.　はじめに

大阪方言においては，次のような文末詞「ワ」や「カ」が用いられる。

（1）そんなもんいらんワ。

（2）なんや，知らんのカ。

これらの文末詞の後に「イ」を接続させて，「ワイ」「カイ」という形をとることもある。

（3）そんなもんいらんワイ。

（4）なんや，知らんのカイ。

本稿では，このような「ワ」や「カ」に「イ」が付加された場合に，「イ」がどのような意味を持つのかということを明らかにすることを目的とする。なお，記述に当たっては，筆者（1987 年大阪府八尾市生まれ，24 歳男性。現在まで外住歴なし）の内省をもとに分析する。

本稿の構成は以下のとおり。まず§2 で「イ」に関する先行研究を整理する。そして，§3 で「イ」が生起する環境を整理し，§4 と§5 で，「ワイ」と「カイ」がどのような場合に用いられるかを，それぞれ「ワ」と「カ」と置き換えられるかという点で整理する。そして，それを踏まえて，§6 でそれら両者における「イ」に共通する意味を抽出することを試みる。最後に，§7 でまとめを行う。

2.　先行研究

文末詞につく「イ」については，「イ」のつかない文末詞と同じ扱いをされる，あるいはより「強調」したものだという説明がされることが多く，「イ」にどのような意味があるか

ということはあまり取り上げられてこなかった。大阪府南部の方言における文末詞を素描した佐藤（1973;1975）でも，「ワイ」「カイナ」などが取り上げられているが，「イ」が持つ意味については特に述べられていない。

大橋（1963）は，栃木方言において「ナ」「ネ」「サ」「カ」などの文末詞に後接する「イ」について記述している。しかし，「イ」のつく場合とつかない場合とで，意味は同じであるとしており，「イ」の出自などに主眼を置いている。

友定（1986）は岡山県方言における文末詞「ワ・ワイ」について記述しているが，大橋（1963）と同様に，両者の意味の違いについては特に触れておらず，その現れ方が異なる以外は，同じものとして扱っている。

以上のように，文末詞に「イ」がついた形，あるいは「イ」そのものについて言及されることはあるものの，「イ」の意味を詳細に記述した先行研究は管見の限り見られない。そこで，本稿では，「イ」がつく文とつかない文とを比較することによって，大阪方言における「イ」が持つ意味を抽出してみたい。ただし，§6 で述べるように，「ワ」や「カ」といった文末詞に後接する「イ」が持つ機能は，「ワ」や「カ」といった文末詞ほど大きくなく，あくまで「添える」という程度のものである。

3. 形式的特徴

ここでは，「イ」が生起する環境について整理する。本稿冒頭で述べたように，「イ」は文末詞「ワ」や「カ」に後接する。(3)（4）のような「ワイ」「カイ[1)]」だけでなく，「ナ」がついて「ワイナ」「カイナ」となることもある。

（5）そら，誰だって失敗ぐらいするワイナ。

（6）そんなとこにあるカイナ。

この場合，「ワ／カ」に「イナ」が後接しているとは考えられない。なぜなら，当該方言において，「ワ」「カ」「ナ」といった文末詞は，様々な述語に後接することができるが，「イナ」が述語につくことはできないからである。

（7）そら，誰だって失敗ぐらいするワ。

（8）そら，誰だって失敗ぐらいするナ。

（9）そら，誰だって失敗ぐらいするワイ。

（10）そら，誰だって失敗ぐらいするワイナ。

（11）*そら，誰だって失敗ぐらいするイナ。

（7）と（8）からわかるように，「ワ」と「ナ」はどちらも述語に直接後接する。そして，（9）と（10）からわかるように，「イ」は「ワ」に後接する。しかし，（11）にも示したように，「イ」は述語に直接後接することができない。以上のことから，本稿においては，「ワ

1） なお，当該方言には「カエ」という形式もある。これは「カイ」に音形が似ているが，次のように「問いかけ」の場合に「カイ」は使えないが「カエ」は使えるというように，単なるバリエーションとは言えない（詳細は§5.1 を参照）。

・寒くない｛カ／#カイ／カエ｝？

以上のように，本稿では「カイ」と「カエ」を別の形式として扱い，「カエ」は考察の対象から外しておく。

イナ」は「ワ」「イ」「ナ」のように 3 つに分かれると考える。「カイナ」も同様である。ただし，その 3 つのうち「イ」だけは他の 2 つに比べて生起できる環境が限られており，独立性も低いとみなせるため，「イ」は文末詞として扱わず，「ワイ」「カイ」など，「イ」のついた形で 1 つの文末詞とみなす。

なお，標準語ではコピュラ「ダ」に「イ」が後接して「ダイ」となることがあるが，大阪方言においてコピュラ「ヤ」に「イ」がつくことはない。

（12）*こんな遅い時間に誰ヤイ。

ただし，「ジャ」にはつくこともある。

（13）こんな遅い時間に誰ジャイ。

当該方言では，コピュラは基本的に「ヤ」であり，「ジャ」は古めかしい言いまわしや，話し手の特別な心的態度[2] を表す場合を除いて使われないため，本稿ではこのような「ジャイ」は記述の対象とはしない。

以下，「イ」が「ワ」と「カ」に後接する場合に「イ」が表す意味について考察していく。

4.　「ワ」に後接する場合

前節で述べたように，「イ」が文末詞「ワ」に後接する場合，「ワイ」と「ワイナ」の 2 つの形がありうるが，本稿では，「ワイナ」については考察の対象から外す。「ワイナ」における「イ」の意味を考察するには，「ワナ」と対照する必要がある。しかし，「ワナ」についてはその意味・機能が先行研究でも明らかにされていない。§4.1 で述べるように，「ワ」については先行研究があるものの，「ナ」については，その意味・機能を扱った先行研究は管見の限りない。「ワナ」の意味が「ワ」＋「ナ」の足し算で考えられるかどうかはともかくとして，「ワナ」の意味記述を十分に行うためには，「ナ」の意味記述を先に行う必要がある。そこで，本稿では「ワナ」を考察の対象から外し，後に「ナ」の記述を行ってから再び「ワイナ」を含めて「イ」の記述を行う。このことは§5 で取り上げる「カイナ」でも同様である。

以上のような理由で，本稿では「ワイ」と「カイ」における「イ」の意味を抽出することを試みる。本節では，その前段階として，どういう場合に「ワイ」が使えるかを整理する。それに当たって，まずは§4.1 で「ワ」の意味を，野間（2011）をもとに確認し，それを踏まえて§4.2 で「ワイ」の使える場合を整理する。

4.1.　ワの意味

野間（2011）では，大阪方言の文末詞「デ」と「ワ」を対照させながら，それぞれの意

2）　この「特別な心的態度」が具体的にどういうものかは明らかになっていないが，例えば，次のような文脈で使われる。

（トランプをしている）

A：次誰や？

B：おまえ｛ヤ／ジャ｝！

このように，当該命題を聞き手に強く主張するような状況でよく使われる。具体的な意味記述については今後の課題とする。

味を記述した。そのため，本稿に関係のある「ワ」の意味は，「「デ」と比べて相対的に」という含みがあることを先に断っておく。以下の（14）に「ワ」の基本的意味を示す（野間 2011:39）。

（14）ワは，

a. 当該命題の内容が，話し手がその場で考えたり知ったりしたことであり

b. それが話し手の領域にとどまっている

ということを表す。

（14）に示したように，「ワ」の意味は a の「命題のとらえ方」と b の「聞き手への関わり方」という 2 つの点で特徴づけられる[3)]。このことについて，少し説明を加える。

まず（14）についてだが，「ワ」は話し手がその場で考えたことや思い出したことなどについて言う場合に用いられる。したがって，命題が話し手にとってわかりきっていて思い出すまでもない場合には，「ワ」は使えない。

（15）（料理を食べて）あ，これめっちゃうまいワ。

（16）（電話で）

A：駅に着いたで。

B：じゃあ今から迎えに行くワ。

（17）A：あんた誕生日いつ？

B：#4 月やワ。

（15）の「これめっちゃうまい」は，話し手が料理を食べてその場で感じたことである。また，（16）の発話は，A の「駅に着いた」という発話を受けて「今から迎えに行く」ということを決めた[4)] という状況である。一方，（17）は，相手に誕生日を聞かれて答えているという場面だが，一般的に自分の誕生日というものは，よほどのことがない限り思い出したり考えなおしたりすることのない情報である。したがって，（17）において「ワ」は使えない。

次に，（14）の「話し手の領域にとどまる」について説明する。

（18）（独り言で）あ，雨降ってきたワ。

（18）は独り言であり，聞き手に伝えることを目的としていない発話である。「ワ」は，このような聞き手目当てでない発話でよく使われる。

（19）（友人宅で）ほな，もう帰るワ。

一方，（19）の場合は，発話そのものは独り言ではなく，聞き手に向けられたものである。しかし，このように「ワ」を付加した場合，「帰る」という命題内容は，話し手が行う行為であって，聞き手は一緒に帰らない。つまり，発話は聞き手に向けられているものの，その内容はあくまで話し手自身のことであり，「話し手の領域にとどまっている」と言えるの

3） 「ワ」と「デ」は，この 2 点において対照的である。

4） A が駅についたら B が迎えに行くことは，これよりも前に決めていたかもしれないが，「A が駅に着いた」という情報を得たことによって「駅に迎えに行く」という情報が「活性化された」とでも言うべき状態になったということである。

である[5)]。

この「話し手の領域にとどまる」という性質は,「聞き手から離れる」という含みを持ち,聞き手を突き放すようなニュアンスを伴うことがある。

（20）A：ちゃんと勉強してるんか？

B：やってるワ！

（20）の発話は,「ちゃんと勉強してるんか？」と疑う A に対して，A に反発しつつ「自分は勉強している」という情報を提示するものである。聞き手に伝えようとしているという点で,「話し手の領域にとどまっている」という性質とは少し異なるように思えるが，これは,「話し手の領域にとどまる」という意味が前面に押し出されたことによって「突き放し」のニュアンスが出るためである。

4.2.　ワとワイ

ここからは,「ワ」と「ワイ」を相互に置き換えられるかどうかを確認する。基本的に「ワイ」が使える場合は「ワ」も使えるが，その逆は必ずしも成り立たない。つまり,「ワ」は使えるが「ワイ」は使えないという状況もありえる。そこで，以下では,「ワ」が使えて「ワイ」が使えない場合（§4.2.1）と,「ワ」と「ワイ」が両方使える場合（§4.2.2）に分けて記述する。

4.2.1.　ワが使えてワイが使えない場合

まず，独り言の場合,「ワイ」は使えない。

（21）（独り言で）あ，雨降ってきた｛ワ／#ワイ｝。　（（18）再掲）

（22）（独り言で）あー，もう疲れた｛ワ／#ワイ｝。

また，次のような場合も,「ワイ」は使えない。

（23）（料理を食べて）あ，これめっちゃうまい｛ワ／#ワイ｝。　（（15）再掲）

（24）（電話で）

A：駅に着いたで。

B：じゃあ今から迎えに行く｛ワ／#ワイ｝。　（（16）再掲）

これらの例文は，§4.1 で述べた,「ワ」が使用される典型的な例である。いずれの例でも,「話し手がそのときに考えたり思い出したりしたことである」という性質と,「話し手の領域にとどまる」という性質を併せ持つ。つまり,「ワイ」はそういった「ワ」が典型的に用いられる場合には使えないということである。

4.2.2.　ワもワイも使える場合

「ワイ」が使えるのは，§4.1 の（20）のような「突き放し」のニュアンスを伴う場合である。

5）なお,（19）の「ワ」を「デ」にすると，聞き手に対して一緒に帰ることを促す発話になる。つまり,「デ」は命題内容が話し手の領域にとどまらず，聞き手の領域に踏み込むのである。

（25）A：ちゃんと勉強してるんか？
　　B：やってる｛ワ／ワイ｝！　　（（20）再掲）
（26）（なかなか話を聞いてくれない相手に対して）
　　もうええ｛ワ／ワイ｝！他の人に聞く｛ワ／ワイ｝！

こういった「突き放し」のニュアンスを伴う例は，§4.1 でも触れたように，「ワ」が用いられる典型的な例ではなく，「話し手の領域にとどまる」というというのは，相手に対して強い口調で言うことによるため，「ワイ」は強い口調で相手に言い放つという状況と相性がいいと言える。このことから，「ワイ」の「イ」は，発話が聞き手に強く向けられているということを示しているのではないかと考えられる。「イ」の意味・機能については，§6 で再び考察する。

5.　「カ」に後接する場合

本節では，前節の「ワイ」と同様に，「カイ」がどういう場合に使えるかを，「カ」と比較しながら整理していく。§4 でも述べたように，「カ」に「イ」が後接するのは，「カイ」だけでなく「カイナ」の場合もあるが，「カイナ」を考察するには「ナ」に言及する必要があるため，本稿では考察の範囲から外す。「ワイ」の場合と同じく，「カイ」が使える場合は基本的に「カ」も使える。したがって，以下では「カ」が使えて「カイ」が使えない場合（§5.1）と「カ」と「カイ」の両方が使える場合（§5.2）に分けて記述する。また，§5.3 では，「ケ」との関係について述べる。

5.1.　カが使えてカイが使えない場合

大阪方言における「カ」は，基本的に共通語の「カ」と同様の使い方をする[6)]。なお，ここで言う「カ」は，述語に後接し，文末で用いられる「カ」を指す。したがって，以下のような「カ」は除く。

（27）何<u>か</u>冷たいものが飲みたい。
（28）今日のパーティに誰が来る<u>か</u>知らない。

そもそも，これらの「カ」は「カイ」に置き換えられない。

（29）*何カイ冷たいものが飲みたい。
（30）*今日のパーティに誰が来るカイ知らない。

文末において用いられる「カ」のうち，「カイ」に置き換えられないのは，上昇イントネーションで発話される「カ」である。

（31）寒くない｛カ／#カイ｝？
（32）ちゃんと宿題やった｛カ／#カイ｝？
（33）そんなことして大丈夫｛カ／#カイ｝？

6）なお，大阪方言の「カ」が共通語の「カ」と必ずしも同じというわけではなく，その意味が一致するかどうかも明らかではない。しかし，「カ」そのものは共通語と大阪方言とで形式的にも意味的にも大きな違いがなく（後述するように，「カイ」には分布に違いがある），本稿では同じものと仮定して進める。

この「カ」は，聞き手に問いかける疑問文において用いられる「カ」である。つまり，「カイ」は，「問いかけ」という発話行為では使えないのである。なお，共通語では（31）や（32）のような「カイ」は許容される。

また，上昇イントネーションで発話されていなくても，問いかけではなく「疑い」で用いられる「カ」は，「カイ」に置き換えることはできない。

（34）今日は雨やろ｛カ／*カイ｝。

（35）さっきの人，誰やろ｛カ／*カイ｝。

さらに，共通語の「ではないか」相当形式の「ヤンカ」（前川 2000）の「カ」も，「カイ」に置き換えられない[7)]。

（36）何すんねん，危ないヤン｛カ／*カイ｝。

（37）ここにあるヤン｛カ／*カイ｝。

（38）今度東京行くねんヤン｛カ／*カイ｝。それでどっかおすすめの場所ある？

以上，「問いかけ」「疑い」の機能で用いられる「カ」と，「ヤンカ」の「カ」は「カイ」に置き換えられないことを述べた。

5.2.　カとカイが両方使える場合

「カイ」に置き換えられる「カ」は，次のような場合である。

（39）なんや，知らんの｛カ／カイ｝。

（40）ああ，そっちにあったん｛カ／カイ｝。

これらはすべて下降イントネーションで発話される。（39）と（40）はいわゆるノダ文であり，野田（1997）の言う「対事的ムードのノダ」である。これは，話し手が命題内容を既定の事態として把握したことを表す用法であり，聞き手を必ずしも必要としないという性質を持つものである。これらの例文を非ノダ文にすると，「カイ」が使えなくなる。

（41）なんや，知らん｛カ／#カイ｝。

（42）ああ，そっちにあった｛カ／#カイ｝。

（41）と（42）では，ノダ文の場合と少し意味合いが変わるものの，「カ」を使っても問題ない。しかし，この場合に「カイ」は使えない。

また，「カイ」は次のような反語的な疑問文で使える。

（43）そんなもん食べる｛カ／カイ｝。

（44）あんなしょうもないとこ誰が行く｛カ／カイ｝。

（43）は，「そんなもの食べるわけがない」，（44）は「あんなしょうもないところに行くわけがない」という含みをそれぞれ持った発話であり，「カ」と「カイ」の両方が使える。これらは形の上では疑問文だが，聞き手に問いかけるものではなく，疑問を裏返して話し手の主張を聞き手に伝えようとするものである。§5.1 で述べたように，「問いかけ」の疑問文では「カイ」は使えないが，反語なら使える。このことから，「カイ」は聞き手への問いかけや疑いを表す際に用いられる「カ」の意味はもはや持っておらず，命題を聞き手へ提示

7）「ヤンカイナ」という形はあるが，これは「ナ」が後接した「カイナ」であり，本稿の考察の対象から外したものである。

する機能を担っていると考えられる。

しかし，（39）や（40）の例文は，話し手が命題内容を把握した場面であり，積極的に聞き手に向けられた発話ではない。が，同じ「対事的ムードのノダ」を用いた文でも，聞き手のいない独り言だと使いにくくなる。

（45）（店の看板を見て）あ，100 円セール昨日で終わったん｛カ／?カイ｝。

（46）（傘をさして歩いている人を見て）あ，雨降ってるん｛カ／?カイ｝。

したがって，「カイ」は「カ」に比べて聞き手目当て性の強い形式であり，「カ」に付加された「イ」がその役割を担っていると言える。

5.3. ケとカイ

ここでは，「カイ」と「ケ」の関係について触れておく。というのは，日本語において，「カイ」が「ケ」になる/ai/>/ee/という音変化がよく見られ，大阪方言の「ケ[8)]」も「カイ」が音変化したものであるという可能性があるからである。

しかし，結論から述べると，大阪方言の「カイ」と「ケ」は異形態ではない。その理由として，1 つに/ai/>/ee/という音変化が，大阪方言において一般的でないからである。東京方言のように，「デカイ」が「デケー」になるというようなことはない。

また，分布や機能の面でも，「カイ」と「ケ」は同じとは言えない。例えば，§5.1 の（36）と（37）における「ヤンカ」の「カ」は「カイ」には置き換えられないが，「ケ」には置き換えられる[9)]。

（47）何すんねん，危ないヤン｛カ／*カイ／ケ｝。

（48）ここにあるヤン｛カ／*カイ／ケ｝。

逆に，§5.2 の（39）や（40）の「カ」の場合，「カイ」に置き換えることはできるが，「ケ」には置き換えられない。

（49）なんや，知らんの｛カ／カイ／*ケ｝。

（50）ああ，そっちにあったん｛カ／カイ／*ケ｝。

以上のことから，大阪方言における「カイ」と「ケ」は異形態ではなく，別の形式であると言える。ただし，「ケ」と「カ」の関係については，現段階では明らかではない。今後の課題としたい。

6. 「イ」の持つ意味

ここまでの「ワイ」と「カイ」の記述から，それぞれ「イ」のない「ワ」「カ」と分布や機能が異なることがわかった。本節では，§4 と§5 の記述をもとに，「イ」の持つ意味を抽出することを試みる。

結論から述べると，「イ」の機能は次のようにまとめられる。

（51）「ワ」と「カ」に付加された「イ」は，それぞれの文末詞の聞き手目当て性を強

8） 「ケ」か「ケー」かは本稿では問題にしない。

9） ただし，（38）の「ヤンカ」は「ヤンケ」に置き換えられない。この「ヤンカ」は（36）（37）とは異なり，「聞き手にとって未知な情報を持ちかける用法」（前川 2000:88）である。

める。

このことについて，以下で詳しく説明していく。

§4.1 の（14）に示したように，「ワ」は「当該命題の内容が，話し手がその場で考えたり知ったりしたことである」「それが話し手の領域にとどまっている」という意味を持つ。そのうち「話し手の領域にとどまる」というのは，あくまで命題内容が話し手に関することであるという意味であって，「ワ」という文末詞自体に聞き手目当て性がないというわけではない。実際，（19）のように，「ワ」の付加された発話が聞き手に向けられることも多い。以下に再掲する。

（52）（友人宅で）ほな，もう帰るワ。　　（（19）再掲）

したがって，（51）に示した「イ」の機能は，「聞き手目当て性を付加する」ということではない。「ワ」に聞き手目当て性がないわけではないからである。以下，「ワイ」と「カイ」に分けて，「イ」の持つ機能について説明する。

§4.2 にまとめたように，「ワイ」が使えるのは，次のような「突き放し」のニュアンスを伴う場合である。

（53）A：ちゃんと勉強してるんか？

B：やってる｛ワ／ワイ｝！　　（（25）再掲）

（53）のような例で「ワイ」が使えるのは，（52）のような場合よりも聞き手目当て性が強いからである。ここでいう「聞き手目当て性が強い」というのは，「聞き手の領域に踏み込む」ということとは異なる。例えば，（52）の「ワ」を「ワイ」に置き換えるには，次のように，話し手が怒っているというような文脈が必要である。

（54）（友人宅で邪魔者扱いされて）

もうええ！もう帰るワイ！

一方，（52）の「ワ」を「デ」に置き換えると，（54）とは意味合いが少し異なる。

（55）ほな，もう帰るデ。

（55）の場合，「もう帰る」という命題が話し手だけのものではなく聞き手にも関係することになる。（52）の場合，帰るのは話し手だけだが，（55）は聞き手に帰ろうと促している発話である。以上のように，（52）の「ワ」を「ワイ」に置き換えた（53）と，「デ」に置き換えた（54）の意味が異なるのは，前者の「イ」が「聞き手目当て性を強める」，後者の「デ」が「聞き手の領域に踏み込む」という働きをそれぞれしているからである。

次に，「カイ」について説明する。「カイ」が使えるのは，「対事的ムードのノダ」の文と，反語的な疑問文である。§5.2 で述べたように，「対事的ムードのノダ」は，話し手が事態を既定のものとして把握したことを表す。その例を以下に再掲する。

（56）なんや，知らんの｛カ／カイ｝。　　（（39）再掲）

「対事的ムードのノダ」は，必ずしも聞き手を必要としないが，聞き手がいてもいい。実際，（56）は，聞き手が「知らない」ことを聞いて，それを把握したことを表している。この例において「カイ」を使うと，「カ」の場合に比べて，聞き手目当て性が強い。具体的には，「カイ」は「知らない」ことについて聞き手を責めるようなニュアンスを伴う。したがって，次のような例で「カイ」は不自然に感じられる。

（57）あ，おまえ知らんの｛カ／#カイ｝。まあ，来てなかったからしゃあないな。

この例は，聞き手が会議に欠席していたため，そのことを知らなかったという文脈であるが，そのような場合に「カイ」は使いにくい。なぜなら，「カイ」を使うと，聞き手を責めるようなニュアンスが出て，「来てなかったからしゃあない」という発話は合わないからである。

では，（56）が非ノダ文になると「カイ」が使えないのはなぜだろうか。以下に例を再掲する。

（58）なんや，知らん｛カ／#カイ｝。　　（（41）再掲）

（56）と（58）は，森山（1992）の言う「疑問型情報受容文」である。森山（1992:42）によると，これらの文における「カ」は，「世界の在り方についての（未確認の推測も含めた）認識を現実世界と対照して書き換え，新たな認識を構成していくという過程を表す」と述べている。平たく言えば，話し手が前もって持っていた認識と現実が，何らかの点で一致せず，その調整を行った後に，事態を受け入れたということを「カ」が表しているということになる。しかし，ノダ文である（56）において，情報の受け入れ（把握）を表しているのは「ノダ」であって，「カ」ではない。（56）から「カ」を取り除いても，話し手が情報を把握したということは表されている。

（59）なんや，知らんの。

一方，非ノダ文である（58）において，今述べたように，情報を受け入れたことを表すのは「カ」である。つまり，（58）の「カ」は情報の受け入れとそれまでの思考過程を表しているだけであり，そのような形式の「聞き手目当て性を強める」ことはできない。この形式そのものの聞き手目当て性については，特に表されていないからである。

また，疑問文の「カ」が，反語的な意味合いを含む場合にのみ「カイ」に置き換えられるのは，（53）のような「突き放し」のニュアンスを伴う「ワイ」と同じで，発話を聞き手に「持ちかける」というよりかは「突きつける」といったニュアンスを伴う。「問いかけ」の疑問文で「カイ」が使えないのもそのためである。「イ」が「カ」に付加されたことによって聞き手目当て性が強められた結果，「持ちかける」よりも「突きつける」になったのである。

なお，「ヤンカ」の「カ」を「カイ」に置き換えられないのは，「ヤン」自体が強い聞き手目当て性を持っているからであり，「デ」に「イ」を付加させられないのも同じ理由によると考えられる。

以上のように，「イ」は「文末詞の聞き手目当て性を強める」という働きを持つ。ただし，「聞き手目当て性を強める」という機能はかなり抽象的なものである。これは，「イ」の独立性が低い（「イ」だけでは文末詞として成立しない）ことに表れている。

7.　まとめと今後の課題

以上，本稿では，「ワイ」と「カイ」から，「イ」の持つ意味を抽出することを試みた。そして，「イ」の意味・機能は次のようにまとめられることがわかった。

（60）「イ」の意味・機能

「ワ」と「カ」に付加された「イ」は，それぞれの文末詞の聞き手目当て性を強める。

今後の課題として挙げられるのは，§3 と§4 でも触れた「ワイナ」「カイナ」という形式の記述である。本稿では，「ナ」が関わってくることから，これらの形式は記述の対象に入れなかったが，「ナ」の記述とともに，次の課題である。それによって，上に示した「イ」の意味記述の妥当性を検証する必要がある。また，§3 で触れたが，「ジャイ」という形式についても記述が必要である。また，他方言における「イ」との対照もその後の課題として挙げられるだろう。

【参考文献】

大橋勝男（1963）「文末詞『い』―栃木地方方言における―」『国語教育研究』8，pp.415-424，広島大学教育学部

佐藤虎男（1973）「大阪府方言の研究（2）―泉南郡岬町多奈川方言の文末詞（1）―」『学大国文』16，pp.15-26，大阪学芸大学国語国文学研究室

――――（1975）「大阪府方言の研究（3）―泉南郡岬町多奈川方言の文末詞（2）―」『学大国文』18，pp.75-92，大阪学芸大学国語国文学研究室

友定賢治（1986）「岡山県方言の研究―文末詞『ワ・ワイ』について―」『国語表現研究』3, pp.26-33，国語表現研究会

野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版

野間純平（2011）「大阪方言の文末詞デとワ」『阪大社会言語学研究ノート』9，pp.30-45，大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

前川朱里（2000）「『（ヤ）ガナ』と『ヤンカ』の用法・機能上の相違について―『ではないか』との対比を中心に―」『現代日本語研究』7，pp.77-97，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座

森山卓郎（1992）「疑問型情報受容文をめぐって」『語文』59，pp.35-44，大阪大学国語国文学会

のま　じゅんぺい（大阪大学大学院生）

dpgcn317@kawachi.zaq.ne.jp